

大津百町瓦版

大津・町家・まちなか・いろいろ情報

秋季号 [No. 45]

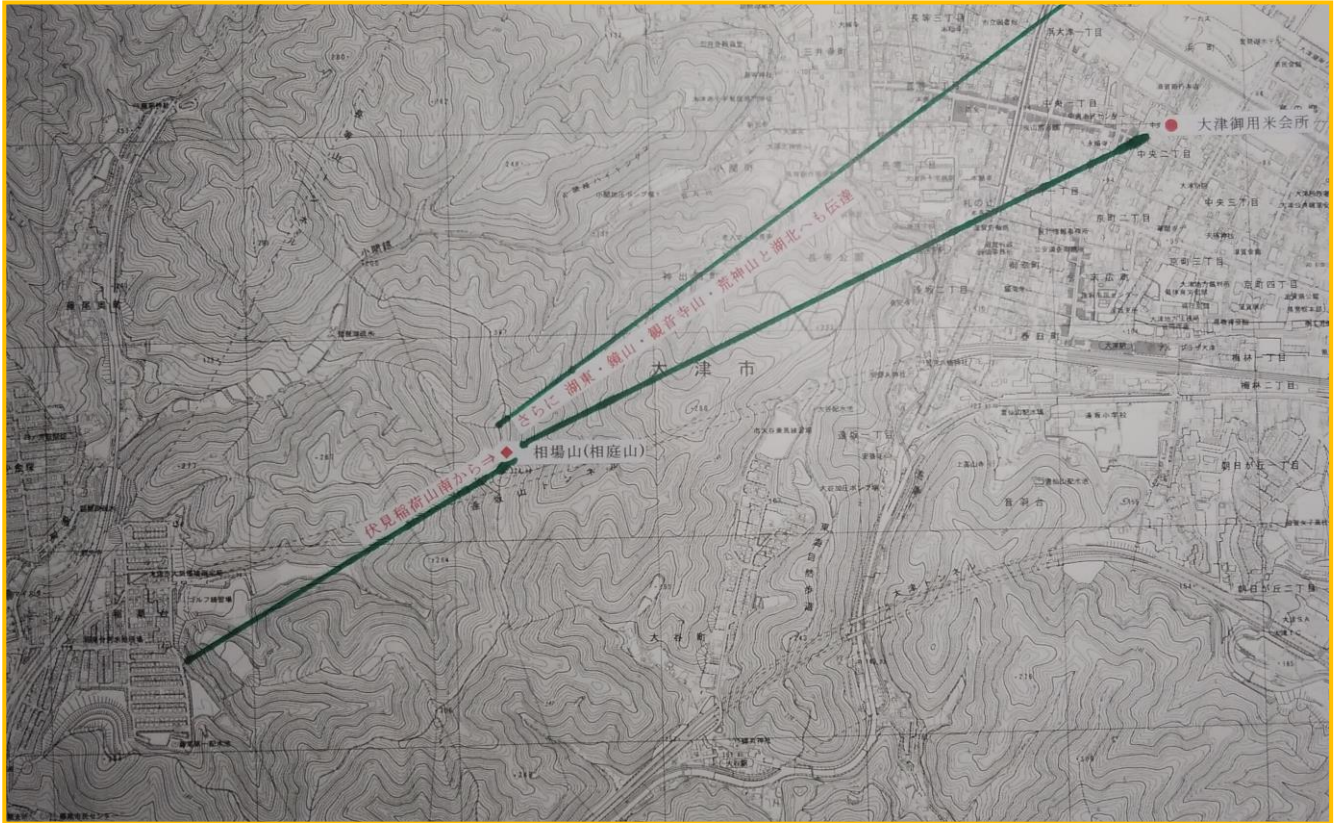
2020年 10月

発行 大津の町家を考える会

大津市中央1丁目8-13

TEL・FAX 077-527-3636

Email: otsu.machiya@gmail.com



大津御用米会所と相場山

東海道随一の都会であった大津は、隣の大都市京都、大坂に近くびわ湖水運によって運ばれてくる米穀の量は他の町々にならぬものでした。

当時の米仲間、問屋を中心とする株仲間問屋・小売屋・荷米屋が幕府に銀換算で買い受け米会所において取引の仲介を行っていました。しかし京都の商人が大津に入って米取引を行ったり、株仲間による不正が横行するなど取引の低迷が続くなかで米価が他の諸商品に対して低落するという状況が続いたことから幕府が乗り出し、享保二十年(1735)「大津御用米会所」を成立。問屋を中心に組織的に整備したうえ、さらに大坂と同様の商取引の盛んな大津での相場立てを許可しました。

大津での米相場は取引量の大きい大坂堂島の米相場が参考にされていました。堂島の相場を大津へ知らせるには、飛脚や伝書鳩による伝達もありました。しかし速く知らせるのが重要ですから手旗信号による伝達によって代わられました。

文化十二年(1816)園城寺三別所の山頂に、米相場の「気色見」の場所(二間半四方)をと拝借を願い出許可されたのです。その場所は明治十四年の『近江国滋賀郡誌』に「相庭山」の名前が出ていて、現在の地図で見ると小関越と逢坂山の間にある小関山(325m)ではないかと云われています。

大坂の堂島から吹田・千里山↓高槻・阿武山↓柳谷・西山↓稲荷・二石山↓小関山のコースに点在する「気色見」に旗振り人と遠眼鏡(望遠鏡)を持った者が登り、大坂・堂島の米相場の午前と午後二回の相場高下を受けていたのです。幾つかの相場伝達に関する資料により、この通信手段は驚くほど速くなんと大津まで5分の速さだったそうです。

電話が開通した明治二六年、大坂II和歌山の間で電話と旗振り競ったところ、初期電話は約一時間掛かったのに対して旗振りのはなんと3分だったようです。